

2. 錦川の恵みに育まれた営みにみる歴史的風致

(1) はじめに

多くの支流が集まり山口県で最大の流域面積を持つ錦川は、山口県を代表する清流としても知られています。

山口県と島根県の県境に位置する^{あざみ が たけ}助ヶ岳をはじめとし、岩国市内で^{う さ がわ}宇佐川、^{ほんごうがわ}本郷川、^{いき み がわ}生見川等の支流を合わせて岩国市街地に達し、錦帯橋の下流で錦川本川（^{いまづ がわ}今津川）と^{もんぜんがわ}門前川に分派して瀬戸内海に注ぎます。錦川は水害をもたらす一方で、多くの恵みをもたらし、人々の営みに深く関わってきました。

錦川水系沿いには古くから集落が形成され、江戸時代の城下町の成立と川舟による水運の発展により、錦川における往来が促進され、地域独自の文化や産業が花開きました。陸上交通の発達や道路の整備によって現在は舟の往来は途絶えましたが、清流の恵みを生かした米作りや酒造り等のその地域独自の産業活動とそれに伴う祭りや、^{かんまい}神舞等の伝統行事が錦川水系沿いの各地域で錦川を中心とした人々の営みとして続いています。



錦帯橋と南桑船（岩国徴古館蔵）



錦帯橋と川舟の水運（岩国徴古館蔵）

(2) 錦川の恵みに育まれた営みに関わるまちなみ・集落と建造物

1) 錦川の恵みに育まれた営みに関わるまちなみ・集落

錦川上流域（岩国市内）の物流拠点として発達したのは、毛利家本藩領の錦町広瀬です。錦川と^{やましろうかいどう}山代街道の交点に位置し、宿場町・川港として栄え、和紙や薪炭、材木などがここから下流へと運ばれました。川の流通を担ったのは^{なぐわぶね}南桑船と呼ばれる船であり、錦帯橋付近や川と海をつなぐ物流拠点として栄えた^{いまづ}今津まで下って商売を行い、荷を入れ替えて上流へと戻って行きました。

錦川上流域（岩国市内）は平地が少なく、集落が点在しています。南桑地区のように、前面の川と背面の山に挟まれた水運と鉱山を生業とした集落がみられます。

錦川の流れが穏やかになる錦川中流域（岩国市内）の^{ゆかば}行波地区や^{みなみごうち}南河内地区では、錦川の水による米づくりが盛んに行われ、米づくりを主とした集落が形成されています。

江戸時代に岩国城下と瀬戸内海をつなぐ港として栄えた錦川下流域（岩国市内）の^{かわしも}今津は、物流や交通の中心が川舟から鉄道等の陸上交通に変遷する明治時代には、対岸の川下地区と共に錦川の水とその水で育てられた米を使った酒造りが行われるようになり、現在に至ります。



錦川上流域 (岩国市内) ・錦町広瀬



錦川上流域 (岩国市内) ・美川町南桑



錦川中流域 (岩国市内) ・行波



錦川下流域 (岩国市内) ・今津、川下



錦川下流域 (岩国市内) ・今津、川下のまちなみと瀬戸内海の島々

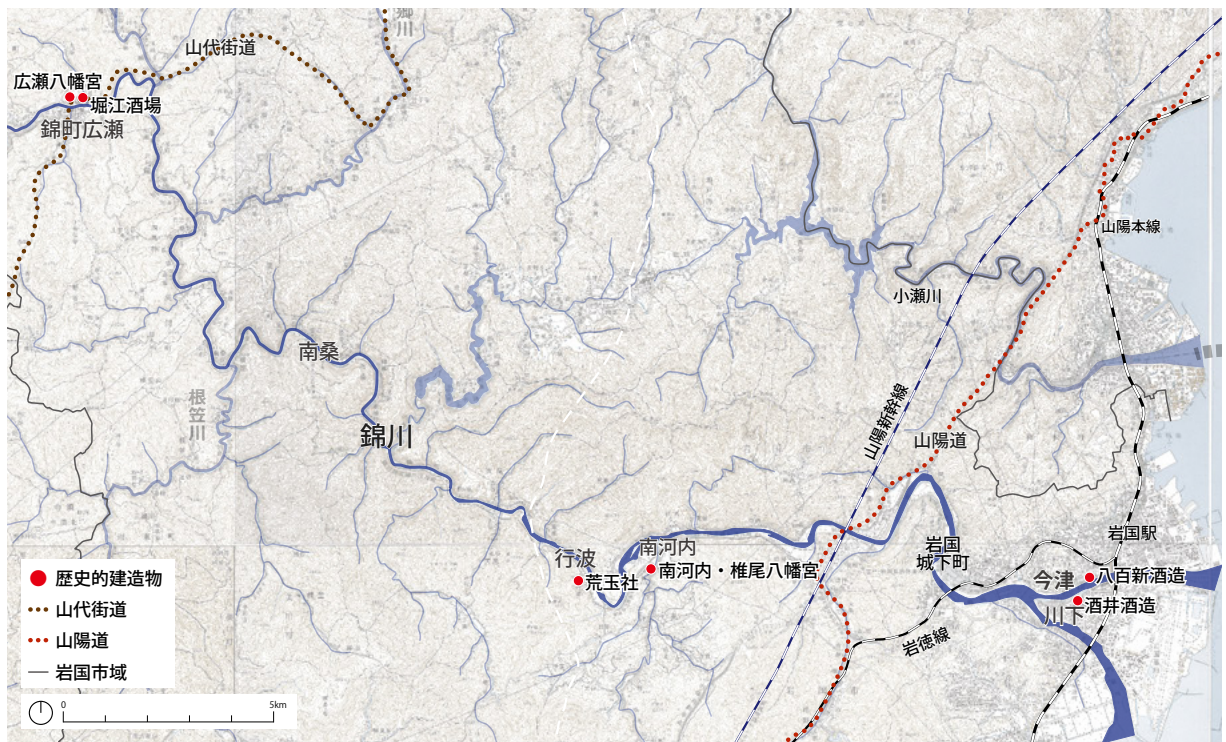


図2-16 錦川の恵みに育まれた営みに関わる地域と建造物の位置

2) 錦川の恵みに育まれた営みに関わる建造物

ひろ せ はちまんぐう

① 広瀬八幡宮

【市指定有形文化財（神殿、横町）】

建築年代：神殿：天保^{てんぽう}6年（1835）、横町：弘化4年（1847）

広瀬八幡宮は、広瀬地区の高台にある神社です。大同2年（807）に豊前国（現在の大分^{うさ}県宇佐市）宇佐八幡宮から分霊^{ぶんれい}を迎えたことが始まりとされ、室町時代の火災によってその多くを焼失しましたが再建され、現在の神殿と横町は江戸時代末期のものです。

参道の石段を登り鎮守の森を抜け、広い境内の奥の一段高い場所に見えるのが、市内では他には見られない中央に通り土間を有する壁のない横町と呼ばれる平入の建物です。

横町の通り土間を抜けた広い拝殿の奥には、彫刻^{くみもの}と組物が美しい鋼板葺の三間社流造の神殿が鎮座しています。

境内において、広瀬八幡宮例祭が行われます。



広瀬八幡宮・石段



広瀬八幡宮・横町



広瀬八幡宮・横町・拝殿・神殿



広瀬八幡宮・横町（中央土間）



広瀬八幡宮・横町と天井でのみ山の収納状況



広瀬八幡宮・神殿

あらたましや
②荒玉社

建築年代：明治13年（1880）以前（拝殿、本殿）

寛政3年（1791）に近隣の神社を合併合祀されて荒神社として地域の鎮守社となり、文化8年（1811）の本殿再建で荒玉大権現と改称され、天保10年（1839）の拝殿新造によって現在の荒玉社と改称されたと伝わっています。

明治13年（1880）の神社明細書に記載があり、各部材の経年変化の状態からもそれ以前の建築と推定されます。

錦川中流域（岩国市内）沿いの集落である行波地区を見下ろす高台に建つ神社ですが、拝殿と銅板葺の一間社流造の本殿共に地域の人々に大切にされていることが伝わってくるほどに管理が行き届いており、その境内で行われる荒玉社例祭では岩国行波の神舞の一部が毎年舞われ、式年祭（7年間に一度）では錦川河川敷の神殿への神移しが行われています。

昭和46年（1971）岩国市報に荒玉社境内で例祭の神舞が舞われた様子が掲載されています。



荒玉社例祭の神舞（昭和46年（1971）岩国市報）



荒玉社の石鳥居



荒玉社の木製灯籠と拝殿



荒玉社本殿



荒玉社の例祭（岩国行波の神舞保存会提供）



荒玉社の例祭（岩国行波の神舞保存会提供）

みなみごう ち しいの お はちまんぐう
 ③ 南河内・椎尾八幡宮

建築年代：明治13年（1880）以前（神殿・幣殿・拝殿）

錦川の流れが穏やかになる錦川中流域（岩国市内）と支流の保木川^{ほぎがわ}が交わる南河内の地^{りゃくおう}に室町時代初期の暦応3年（1340）に社殿が再建されたとされる歴史を持ち、室町時代から戦国時代には社領を持つまでであったと伝わる南北河内地域の総氏神神社です。

明治13年（1880）の神社明細書に記載があり、各部材の経年変化の状態からもそれ以前の建築と推定されます。

岩国西中学校前に見える小高い鎮守の森の下にある石鳥居をくぐり、踏み面の広い折れ曲がる171段の石段を登ると、本市では他には見られない神社楼門（焼失後昭和63年（1988）に再建）に迎えられます。境内では嘉永7年（1854）の刻銘のある狛犬等に迎えられ、その奥に鎮座する色彩豊かな板絵が多く飾られた拝殿、曲線屋根の美しい幣殿、銅板葺の三間社流造の神殿は嘉永5年（1852）に再建されたものと伝わります。

春・秋の例祭や天神祭等の祭りが盛んに行われています。



参道入口の石鳥居



楼門へと続く171段の石段



昭和63年（1988）再建の楼門



嘉永7年（1854）の刻銘のある狛犬



嘉永5年（1852）再建と伝わる拝殿



嘉永5年（1852）再建と伝わる幣殿と神殿

(3) 錦川の恵みに育まれた営みに関わる人々の活動

1) 広瀬八幡宮例祭

毎年10月第四日曜日に行われる広瀬八幡宮の例祭は錦町最大規模の秋祭りです。

かつての様子を伝えるものとして、昭和21年（1946）、昭和初期の広瀬八幡宮例祭の古写真が残されています。

錦町の各地域から子供が乗って大人6人で担ぐ「もみ山」と呼ばれる造花に飾られた山車が出ます。このもみ山を先頭に、旗、清め樽、太鼓、神輿の順に行列が町内を巡り、御旅所のある須賀社にて引き返して、広瀬八幡宮参道の石段を登る光景は収穫に対する感謝を伝える力強さを感じるものです。

しかしながら、美川町の鉾山採掘や岩日線の鉄道工事の時代には多くの出店や人々で賑わってきた広瀬八幡宮の例祭においても、近年は人口減少と少子高齢化によって、もみ山の乗り手となる子供やもみ山や神輿の担ぎ手となる若者の確保が困難となってきましたが、地域の伝統を守り続けていこうとする人々の想いに支えられて今も執り行われています。



昭和21年（1946）広瀬八幡宮例祭のもみ山
（錦ふるさとセンター蔵）



広瀬八幡宮例祭のもみ山（広瀬八幡宮提供）



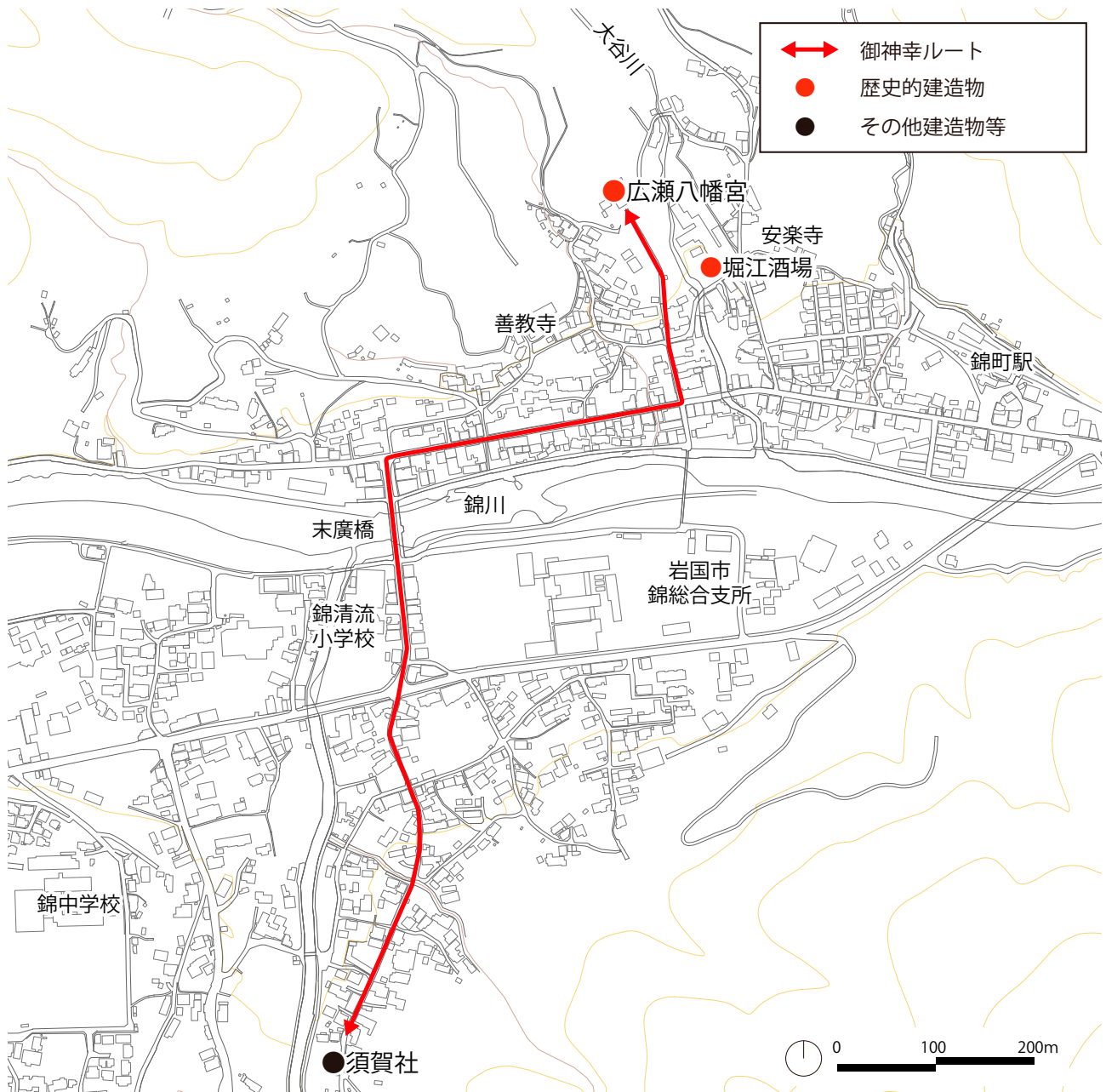
昭和初期の広瀬八幡宮例祭（錦ふるさとセンター蔵）



広瀬八幡宮例祭の御神幸・須賀社での餅まき（広瀬八幡宮提供）



広瀬八幡宮例祭の御神幸・石段を駆け上がる神輿（広瀬八幡宮提供）



2) 岩国行波の神舞 いわくにゆかば かんまい

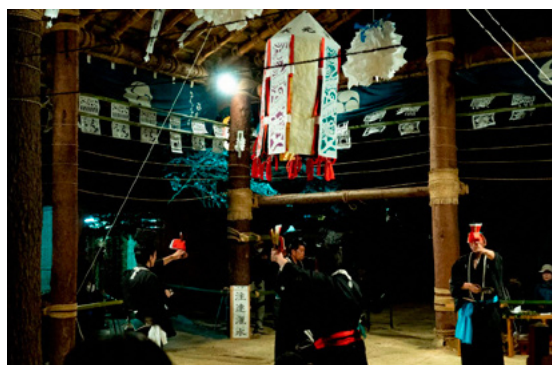
【重要無形民俗文化財】

元々は江戸時代初期の頃から地域の鎮守社例祭で神官による神楽が奉納されていましたが、寛政3年（1791）に荒神社への合併合祀を期に、7年期に一度の大規模な祭り（式年祭）が始まったとされます。その後、明治4年（1871）に神官による神楽奉納が禁止されたことから、行波の人たちによって現在に続く神舞が奉納されるようになりました。

例年10月14日に行われる荒玉社例祭では、荒玉社境内にて神舞の一部が奉納されます。7年期に一度の式年祭は4月の初旬に行われますが、錦川河川敷に赤松の巨木8本を使い、約7.2m四方、高さ約6mの切妻屋根を持つ^{きりつま}神殿^{かんどん}が建てられ、その上流25mの位置に高さ25mにもおよぶ赤松の登り松が建てられる壮大な舞場が造られるだけでなく、その舞場を飾る^{てんがい}天蓋をはじめとした切り紙飾りを含めた準備は地域総出で行われます。そして、その舞場において披露される全12座の神舞は多くの人々を魅了しています。



夕闇の神殿（岩国行波の神舞保存会提供）



岩国行波の神舞（岩国行波の神舞保存会提供）



岩国行波の神舞（岩国行波の神舞保存会提供）



松登り（岩国市蔵）



岩国行波の神舞（岩国市蔵）



岩国行波の神舞（岩国市蔵）

式年祭は、4月初旬の土曜日と日曜日に行われます。式年祭が行われる年を迎えると、自治会及び岩国行波神舞保存会を中心に、式年祭を執行するための組織づくり、そして日取りや準備等の段取りが協議され、準備が進められます。

三月になると土曜、日曜ごとに神殿づくりが行われ、地区総出で開催に向けた準備が行われます。

式年祭1日目の土曜日には、夕方から荒玉社と神殿において神移しの神事が行われたのち、神事と神楽の奉納が行われます。

二日目の日曜日には、早朝から祭事が始まります。午前6時半ごろより、舞子全員が錦川に浸かり体を清め、身支度を整えます。そして、神殿で降神の儀などの神事が行われたのち、14～15時間にわたり神楽の各演目が奉納されます。昇神の儀が行われ、行程が終了するのは21時半ごろにもなります。



図2-18 岩国行波の神舞に関わる建造物の位置

みなみでう ち しいの お はちまんぐう てんじんさい
3) 南河内 椎尾八幡宮・天神祭

錦川の流れが穏やかとなる錦川中流域（岩国市内）では、稲作と 榎栽培・紙漉きが行われてきました。南北河内地域の総氏神である椎尾八幡宮では、春・秋の例祭や天神祭等の祭りが盛んに行われてきました。

中でも4月の第二日曜日に行われる境内末社の菅原社天神祭は、多くの人が集まります。かつての様子を伝えるものとして、昭和44年（1969）の天神祭での踊りを写した古写真が残されています。昭和年間までは地域総出の踊りや出し物が催され、出店も軒を連ねていましたし、裸坊による御車牛の引き回しは車輪の御車牛を171段の石段を引き下ろす荒々しいものでした。（現在は車道のスロープを引き回します。）

時代の変化によって祭りの形は変わってきていますが、春・秋例祭の神輿、天神祭の御車牛の引き回し等の御神幸は地域の人々によって現在も大切に引き継がれています。



天神祭の踊り（旧楼門前）（昭和44年（1969）、保木自治会提供）



天神祭の踊り（昭和55年（1980）、保木自治会提供）



天神祭の御神幸行列（令和5年（2023）、保木自治会提供）



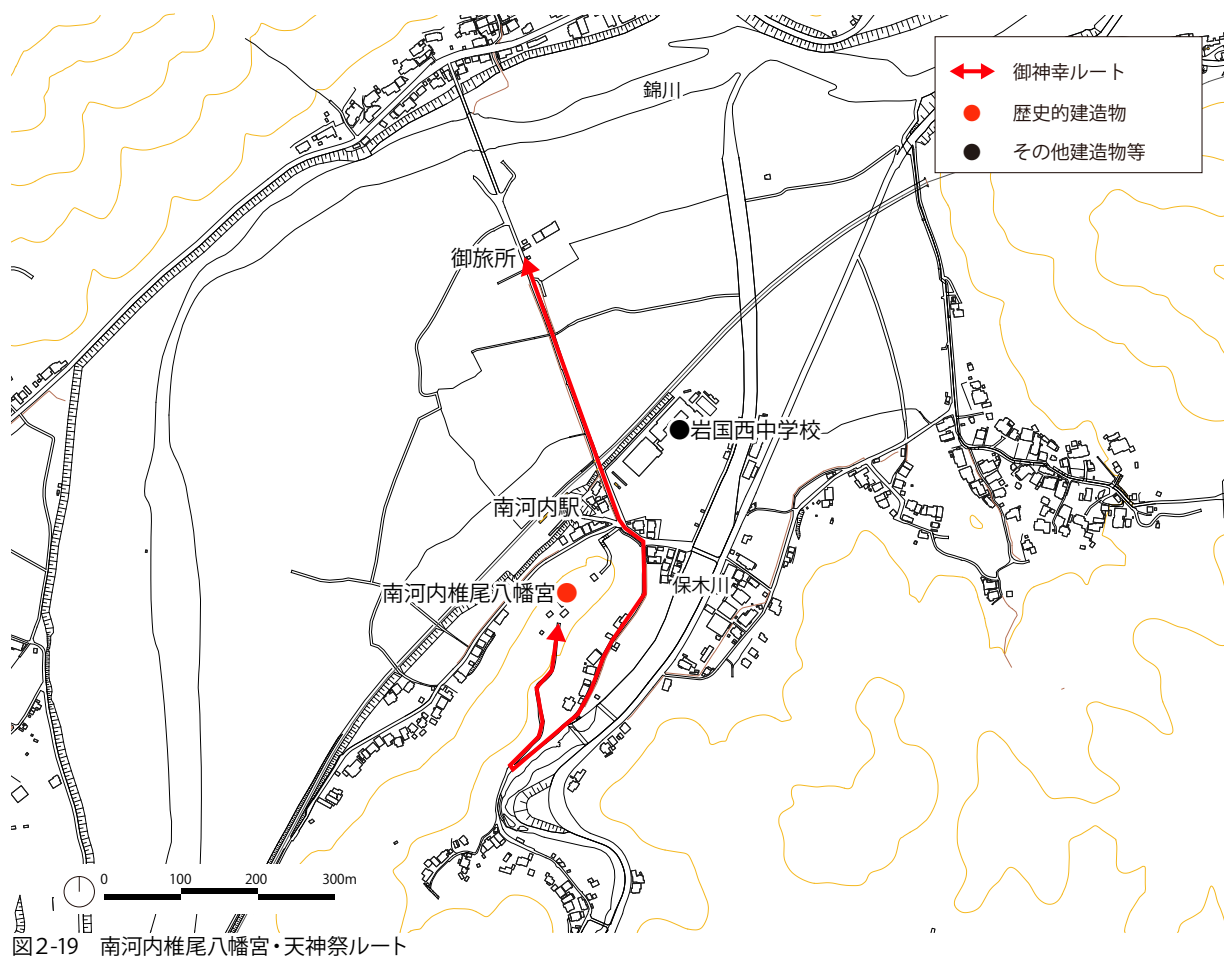
天神祭の御車牛と御旅所での神事（令和5年（2023）、保木自治会提供）



秋期例祭で楼門を出る御神幸行列（平成6年（1994）、保木自治会提供）



秋期例祭で御旅所を出る神輿（平成6年（1994）、保木自治会提供）



4) 錦川の酒造り

ほり え さ か ば

①堀江酒場

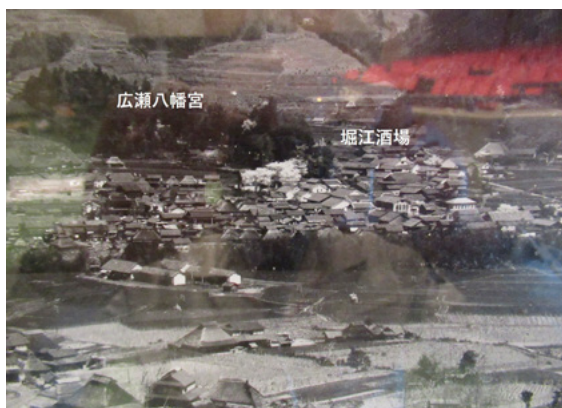
創業：^{めい わ}明和元年（1764） 建築年代：昭和29年（1954）以前

和紙の原料となる楮や木材の集積地として古くからの要衝として栄えてきた錦町広瀬の地に江戸時代の明和元年（1764）に堀江酒場は創業しました。堀江酒場の様子として、大正14年（1925）のまちなみの中の建造物や、昭和初期の当主などを写した古写真が残されています。

そして、幹線道路に面している訳ではなく材料の搬入や商品の搬出の利便性が高い地ではありませんが、現在もその創業の地で酒造りが行われています。その理由は、広瀬の気候と広瀬八幡宮の鎮守の森によって西日を遮る立地、標高983mの^{みず の お さん}水ノ尾山に育まれた錦川の支流である^{おおたにがわ}大谷川の水という堀江酒場が代々大切にしているものがこの地にあるからです。そうした効率的ではなくても自然環境や麴などの生きものと上手く付き合うという酒造りの姿勢から生み出される酒は全国新酒鑑評会で幾度となく入賞し、「^{きんすずめ}プレミアム金雀」はIWC（インターナショナル・ワイン・チャレンジ）純米大吟醸の部で2017・2018年に世界一に輝く等高く評価され、山口県最古の酒蔵として現在に至ります。

立冬の頃には釜場から流れ出る蒸米の水蒸気が錦川対岸からも見られる景色がこの地では250年以上続き、軒先に飾られた杉玉や花が周辺の寺社を訪れる人々の目を楽しませています。

このように地域に根差した堀江酒場は、維持管理に費用と労力のかかる古くからの漆喰塗の酒蔵や石積を美しく維持して広瀬のまちなみの保存にも貢献しています。



大正14年（1925）の広瀬のまちなみ（錦ふれあいセンター蔵）



堀江酒場の当主等（現在も残る酒蔵石積前）（昭和初期、堀江酒場提供）



堀江酒場



漆喰塗の建物を美しく維持する酒蔵正面



軒先に杉玉や花が飾られた堀江酒場



酒蔵前の坂道と美しい石積

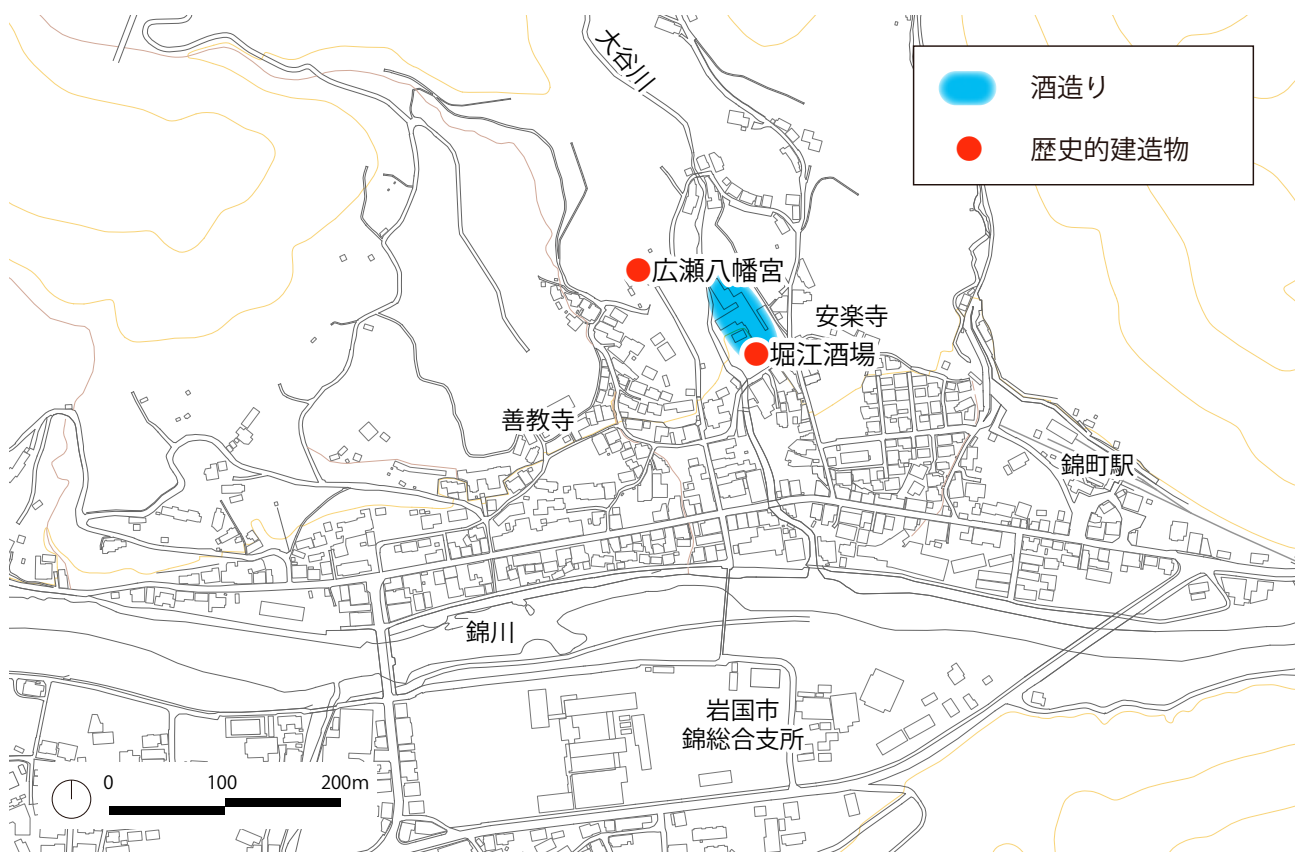


図2-20 酒造り(堀江酒場)の位置

さか い しゅぞう
②酒井酒造

創業：明治4年（1871） 建築年代：昭和25年（1950）以前

錦川の下流域、今津川と門前川に分かれるふもとに酒井酒造が創業した後の明治7年（1874）に隣接する敷地北側に川下小学校の前身となる向今津小学校が創設されて以来約150年、冬の朝に釜場から流れ出る蒸米の水蒸気や軒先に吊るされる杉玉の季節による変化を見て、地域の子供たちは岩国の酒造りの文化を身近に感じながら育っています。

酒井酒造の様子を伝えるものとして、昭和初期の建造物や、昭和6年（1931）頃の杜氏と蔵人を写した古写真が残されています。

昭和22年（1947）に硬水仕込みが全盛の時代に、錦川の伏流軟水を使った「五橋」が全国新酒鑑評会第1位を獲得するなど、創業以来、新しい技術を開発しながらも、基本である米・水・人を大切にした酒造りが評価され続けています。

その酒造りの姿勢と同様に、近代化が必要な事務所棟などは建て替えられていますが、その他の低層木造建築物は昭和25年以前からの建物をまちなみに配慮した改修を行いながら使われ続けています。



昭和初期の酒井酒造（酒井酒造提供）



酒井酒造の杜氏と蔵人（昭和6年頃（1931）、酒井酒造提供）



酒井酒造



店先に杉玉が下がる酒井酒造



酒井酒造の低層木造建築物



岩国城下町地区にある酒井酒造美術館・五橋文庫

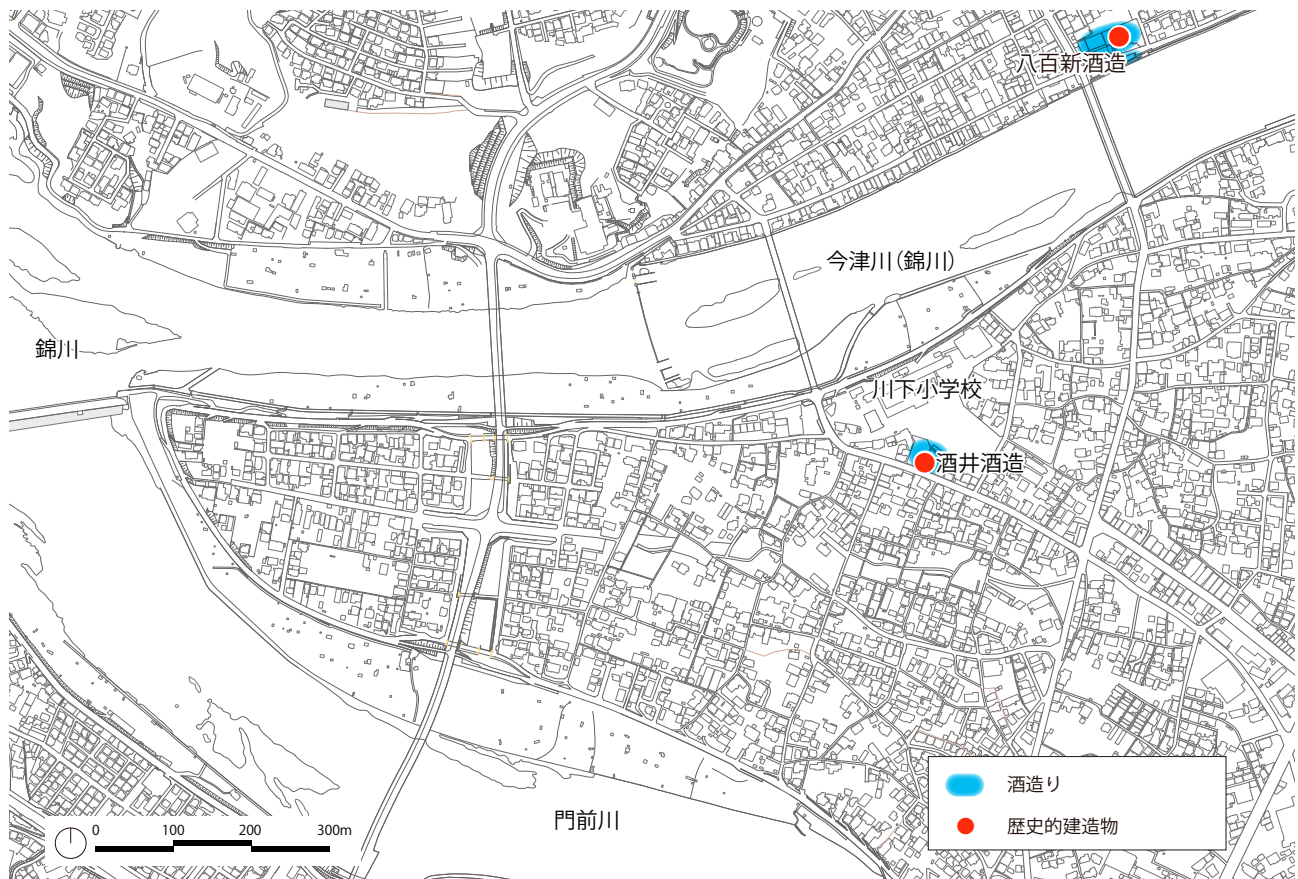


図2-21 酒造り(酒井酒造)の位置

や おしんしゅぞう
③八百新酒造

創業：明治10年（1877） 建築年代：昭和2年（1927）以前

江戸時代には錦川と瀬戸内海をつなぐ物流拠点として栄えた今津のまち。八百新酒造はこの今津地区と対岸の川下地区を繋ぐ^{ことぶきばし}寿橋のたもとに明治10年（1877）に創業したと伝えられています。平成10年（1998）に役目を終えたレンガ煙突や酒蔵の窓からこぼれ出た水蒸気は設備の整備によって今は見ることはできませんが、錦川沿いに掲げられた杉玉や酒の出荷作業は変わらない岩国の酒造りの文化を多くの人々に伝えていきます。近年では敷地を地域の盆踊りや灯籠流しの会場として開放して、より地域との繋がりを深めています。

昭和の頃まで、酒造りを統括する杜氏の多くは農家が農閑期に務めることが通例でしたが、八百新酒造では瀬戸内海に浮かぶ^{いわいしま}祝島（^{かみのせき}上関町）の漁師が杜氏を務めてきました。錦川によって運ばれる米と水、そして瀬戸内海の漁師発祥の酒造りの技術の融合は瀬戸内海と繋がる物流拠点に蔵を構える酒蔵としての特徴です。

また、確認できる記録だけでも昭和2年（1927）以前に建築されている木造3階建の事務所棟は、円形やアーチ窓、曲線の瓦葺庇や手摺子等の特徴的な意匠を持つ漆喰塗の建物ですが、多くの困難を伴いながらもその保存・維持に努めています。更に、老朽化によって解体を迫られていたレンガ煙突についてもクラウドファンディングにて支援者を募って修繕・維持に取り組む等、景観や文化に対する意識の高い活動を実践しています。



昭和初期の錦川と八百新酒造のレンガ煙突（八百新酒造提供）



昭和初期の商標登録プレート



錦川沿いの現在のレンガ煙突



錦川沿いに掲げられた杉玉



円形窓やアーチ窓、漆喰壁が特徴的な八百新酒造



瓦葺底と木製手摺子の曲線で構成されたエントランス

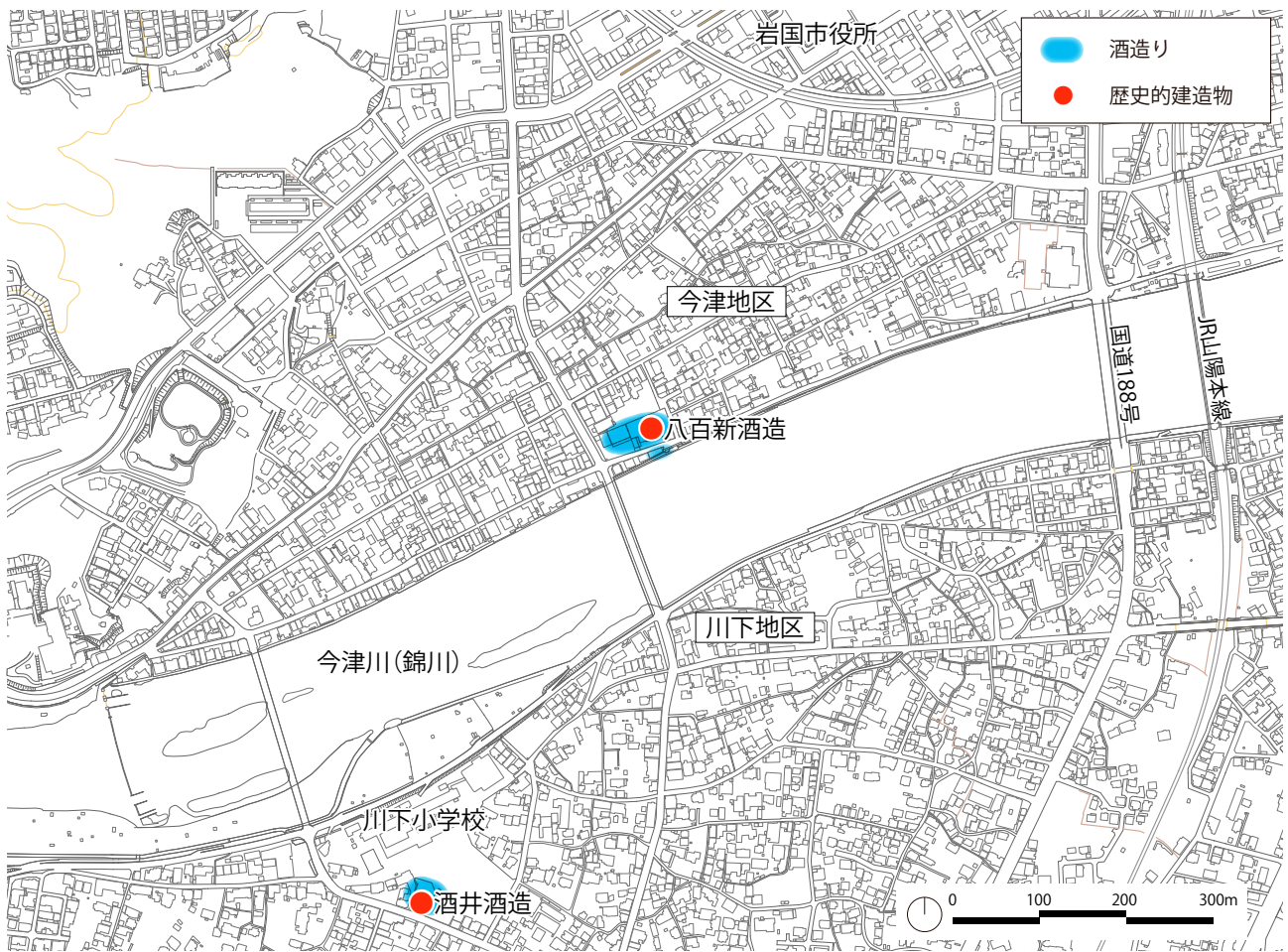


図2-22 酒造り(八百新酒造)の位置

(4)おわりに

錦川は古来より人とのものが行き交っており、特に江戸時代以降は、毛利家本藩の山代地域と岩国領、そして瀬戸内海をつなぐ重要な交易ルートでした。そして、錦川での往来による各地域の発展を通して、独自の文化が育まれてきました。

錦川上流域(岩国市内)の広瀬地区の広瀬八幡宮例祭では、水運と街道の交わる場所として栄えたかつての面影を残す宿場町と、それを見下ろす堂々たる社を舞台に、もみ山を先頭とした行列が練り歩きます。

錦川中流域(岩国市内)の岩国行波の神舞の、特に7年期に一度の式年祭は、錦川沿いに神殿と登り松が立てられ、二日間にわたり盛大に祭事が執り行われるもので、地域全体でまもり伝えられてきました。

同じく錦川中流域(岩国市内)の南河内椎尾八幡宮の天神祭では、社と錦川に面した御旅所の間で裸坊による御車牛の引き回しや行列が地域の人々の伝統を大切にしている想いによって続けられています。

堀江酒場や酒井酒造、八百新酒造の酒造りは、錦川と調和したまちなみを残しながら、現在は市の代表的な特産として製造が続けられています。

また、酒造りにとって水と米は必要不可欠なものです。自ら酒米作りに取り組む酒蔵や2018年西日本豪雨による土砂災害によって耕作放棄地となっていた祖^そ生の棚田を酒米作りの田として農家と協働で復活させた酒蔵等もあり、酒蔵の枠を超えた農業振興にも取り組んでいます。

このように、錦川流域では、錦川の恵みによって育まれた活動やそれに伴う歴史的建造物が周辺の環境と一体となり歴史的風致を形成しています。

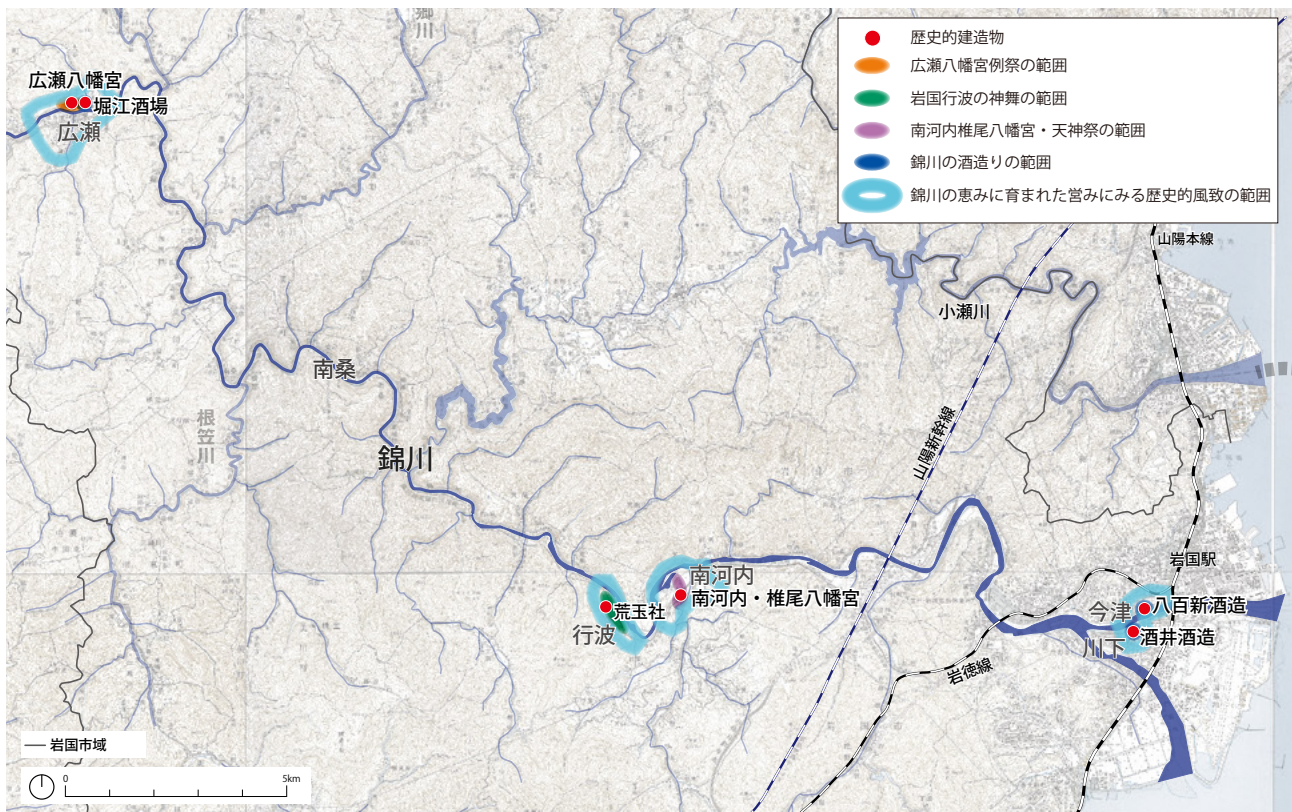


図2-23 錦川の恵みに育まれた営みにみる歴史的風致の範囲